

愛媛電友会会報

第 8 号
 発行 義己
 山崎行所
 松山市番町
 4丁目2番10
 電通共信会
 四国支部内

目次

- 回想独語……………松山 二神 武弘……………一
- 短歌吾が生活の歌……………松山 藤田 基孝……………三
- 故大平福太郎氏おもう……………川之江 野田 亦治……………四
- 編集後記……………編集 子……………四

回想独語

二神 武弘

『昭和二十一年という年』

○松山通信局と引揚浪人の私

○敗戦の落し子エイ

エフ・コール

大部分のサラリーマンにとって
 は衣食住とも最悪状態であった二
 十一年、生き延びるためには放心
 虚脱の空腹の心身に鞭打って、生

存の極限をさ迷うた暗い年の回想
 などとは、凡そ有閑老人の音碌趣
 味にもほどがあると、大方の人は

失笑なさるだろうと思いますが、
 その暗い飢餓の二十一年も既に四

半世紀近い歳月を経た今日、昭和
 元祿の繁栄を謳歌する生活環境に
 安坐していると、人間は元来健忘

症患者なのか、当時の実感を如実
 に認識するのは甚だ難かしい。

話の便宜上、茲に二十一年に焦
 点をしぼって、その頃の激動日本
 の社会記録を拾ってみると、

- 近衛文磨元首相服毒自殺
- 天皇は神格を否定、人間天皇の宣言
- 総司令部公職追放を指令
- 預金封鎖と新円の発行
- 労働組合法を施行
- 米教育使節団、六・三制を勧告

- 新選挙法で総選挙、初の婦人代議士三十九人誕生
- メーデー復活、東京では食糧メーデー「米よこせ」
- 食糧買出しの婦人十人を殺した犯人逮捕
- 第一回国体を京阪神で開く
- 南海大地震起る（道後温泉止まる）

- 全官公労共同闘争委「ゼネスト」を宣言、総司令部の命令で中止

所謂八月十五日の降伏放送を京
 城府の一角の竜山区（朝鮮軍の中
 枢部）で聴いた私は、その後三ヶ
 月余り不解任という巧妙な抑留生
 活を強いられたあと、年も押し迫

る頃に職責をとかれ、石もて追い
 立てられるように排日の暴風圏を
 脱し、初冬の荒天下、超満載で沈
 没寸前の輸送船にすがって、第十
 何回目かの最後の朝鮮海峡を渡
 り、冷雨の博多港に上陸した命拾
 いの安堵感も東の間で、飢餓と底
 冷の中に暦年の数字だけが改まっ
 た二十一年の正月は、食なく酒な
 く、希望も光もない、生涯中の一
 ばん陰惨な新年であったのだが、
 不思議にも其の暗い失意の一年が
 自分の記憶の中では、そのあとの
 平凡な二十余年を頭越しに高く突
 出して、つい二、三年前のことに
 ように浮動しているのである。

◎松山通信局と引揚浪人の奇縁

二十一年の新学年から教壇生活
 に入るように誘はれていたので、
 明けてから空腹放心の身を果物箱
 の代用机に寄せて数冊の書物を丹
 念に読み漁っていると、梅の花盛
 り頃に東京の外地引揚連絡事務所
 から、朝鮮通信関係者の再就職に
 ついて、松山通信局と交渉を進め
 てほしい、という通報を受けた。
 通信局庁舎の所在場所を最寄り
 の局で教えられ、三津浜海岸の仮
 庁舎を訪げると、図らずも片桐

(総務)木村(秘書)の両氏と二十余年ぶりに再会して、公私のよもやま話に花が咲いた。一応の用談をすませて辞去する時に、通信局長(後藤氏?)の審査資料の履歴書の英訳を依頼された。

至急を要すると言われたのが、早速とのえて発送すると、行違いに「至急親展」の通信事務の封書が局から送達され、私自身の再就職の意思を問うていた。

一両日考えて、学校との予約を破談にし、引揚浪人の身を松山通信局資材部に寄せて、怠惰な勤務ぶりを自責しながらも、好意の同僚諸氏の親切に甘えたのが、ゆくりなくも今日電友会の一員として皆さんの末席に連なる奇縁となった次第である。

◎エイ・エフ・コールの陣痛

二十一年の新年度に入った頃から電務課では「連合軍通話取扱者講習会」案の実施計画が進められておった。

講習会実施要項

館

一、講習会場 湯山通信寮、時雨

一、期 間

自五月六日
至同二十六日
二十日間

一、受講者 四県電話局選出交換手
一、実施方法 全員合宿、毎日六時間

一、講習科目

- (1) 英語交換用語
- (2) 初等英語
- (3) 簡易英文法
- (4) 連合軍通話取扱方法
- (5) 実 習

資材部に服務する傍ら、私は英語交換用語の指導を委託せられ、時間割表によって開講四日目の五月十日午後、会場の畳の広間の長い台に、不安そうな顔で行儀よく坐っている二十名の受講者と初めて対面した。

先ず一人ひとりについて英語の既習程度を聞いてみると、英語排斥の戦時教育で育った女の子であるから、殆んど全員が英語未習者で、彼女らに交付してある通信公報号外の英文の基準交換用語例を原文で指導するのは、二十九時間の枠づきの講習では双方に徒勞が多効果薄と判った。

即座の分別で、講習は原則として仮名書きの発音に依り、単語のアクセントと構文のイントネーションを反復して実用化まで練習す

る、謂はば泥縄式の速成方針を約束して、彼女らを英文の恐怖から解放した。

回を重ねるにつれて、職場の責任感に燃える受講者の真剣な努力の結果が現われ、挫折感も消えて勉強が軌道に乗ったので私も気が落ちついた。

饑え渴くような緊張した学習意欲の前には、講習時間の多寡はさして問題ではなかった。

講習が終りに近くなる頃には、湯山一帯の溪谷は晩春の若葉に萌え立ち、百合やつつじの花が華麗な色どりを添えた合宿の静かな夜は、走る水音に蛙の声が和して柑橋の花の芳香が漂うた。

当時は交通事情の極度に不便な頃で、講師も日程の都合では二階に宿泊することがよくあっても、受講生の自習を妨げないように常に気を使っていた。いよいよ最後の講習を終えた晩には双方とも緊張がほぐれ、私は初めて階下に行ってみると、それぞれ帰局準備中で、名残りの談笑に明るくはしゃいでおった。

「皆さん、長い間ご苦労さまでした。ずいぶんきつかったですよ。う。」

「先生、おかげさまで自信ができました。」

「先生、お別れの記念に一筆何か書いて下さい。」

字の書けない私は差し出された紙に、自分が若い受講生の立場になった気持で、即興の歌詞「訣別」を走り書きして渡し、直ぐ自室にあがって安堵の眠りについた。

翌朝は電務課の関係者も見えて終講式が行われ、私も列席してみると、黒板に優しい女文字で前晩の歌詞が清書してあった。彼女らの中の世話人格の一人W君に、黒板は開式前に消しておくように、と注意すると、

「ゆうべは早速譜をつけて、皆で更けるまで一生懸命に練習しました。今朝は合唱して解散すること、主任さんとも諒解済みであります。」

型のように式次は進行し、訣別の合唱に移って、第一節は元氣よく朗らかに歌われたが、第二節の後半に入ると、あちらこちらで白いハンケチが動き、第三節では殆んど全員が噁り泣いて歌声にならなかつた。

『訣 別』

一 長いくさの闇あけて
 昭和二(ふた)十一年の
 五月(さつき)青葉の湯山寮
 一つ勤めにいそしめる

四国四県の姉妹らと
 机ならべて二十日

二 照る日曇る日また降る日
 谷の清水のささやきや
 蛙の声のねんね唄
 春眠ふかき旅まくら
 たどる夢路もかよいたる
 想い出楽し時雨館

三 今別かれ行く西東
 また逢う日まで健かに
 結んだ契りの線たぐり
 四県の山は高くとも
 湯山の道は遠くとも
 呼びて答えん姉妹
 (あねいもと)

◎薄命だったエイ・エフ・コール
 予定の通り習六月からエイ・エフ・コールの業務は開始され、関係者の懸命の努力と連合軍側の指導的協力により漸次軌道に乗った。占領軍の駐在地移動等に伴う

エイ・エフ・コール取扱要員の増員計画も進められ、第二回の講習会は二十一年も押しつまった十二月に、また第三回は翌年の六月に、それぞれ善通寺の旧兵営跡の庁舎で開かれた。

越えて二十二年度には、管内主要局に英語専任指導者を配置して常時養成指導に当る体制が整備せられ、企画運営の適正と従業員の技術の熟練が相俟って、比較的の小規模な四国のエイ・エフ・コール業務は円滑に運営された。

やがて講和条約の発効、占領軍の撤退と新しい時局の進展につれ、管内の業務は急速に縮小を辿り、その奇異で騒がれた毛色の変わった交換業務は、敗戦の焼土に現われた蜃気楼の現象となって消え去ったのである。

私はエイ・エフ・コールが解消過程に入る少し前の昭和二十四年九月、ブラック建ての街頭に漸く秋風が立ちそめた頃に、初代電友会長の小崎政臣氏と同時に、松山通信局(改製の四国電気通信局)を辞して、第二の浪人街道に踏み入り平凡単調な生活を辿ったが、その人生コースで特に心に残ったことは、多面体の人世の一角に

は、無智傲慢な落伍者共が、仮面と偽装でしかつめらしく善男善女の前に出て、信仰も実践もないくせに、口頭の説教をして食って行ける世の中の裏街道の存在する事実であった。まことに臭気芬芳として息のつまる思いがした。

風はしようしよう
 として易水寒し。

短 歌

吾が生活の歌

松山 藤田 基孝

粉をふきて乾きし去年の
 柿ひとつ 焼きて食いたり
 妻と分かちて

ストーブのそばに温めし
 蜂蜜を パンにのぼして
 朝餉終りぬ

鼻唄も よくきこえると
 老妻は 補聴器をかけて
 吾が部屋をのぞく

着ぶくれて小さきカパン提げ
 ゆっくりと 美しきウインド
 のぞきて歩く

鉢に植え 技とよのへし
 錦松に くぼめる石を
 ひとつそえたり

三十年の 交はりなりき
 野位牌に 友のおくり名を
 書かせてもらふ

午後の月は 背に暖かく
 野の道を 妻と石手の
 節分会にゆく

赤き鬼の 持つささらにて
 わが肩を たたきてもらふ
 妻にならいて

青き鬼の 竹のささらの
 下くぐり 撒かれし豆を
 吾も拾いぬ

護摩の火に 当れば息災と
 言ふ妻の うしろより吾も
 手をかざしたり

気むつかしく なりたる吾か
 朝たより 老いたる妻を
 叱りていたり

城山に くないの梅も
 咲きて居む 登ることなく
 日の過ぎてゆく

恋ひ行かむ 八倉の梅の
花どころ 密柑の園に
かはりしと聞くも

老の身を 安らがむと買ふ
ベットなるに 妻はかたくなに
うべなはざりき

不気嫌にて 二三日もだし
居し妻は 今朝より吾に
もの言ひかけぬ

故大平福太郎氏 をおもつ

川之江 野田 亦治

今昔を通じて四十年間の長い間の友人であった大平さんが逝去せられたとの訃報に接し愕然といたしました。氏は病魔におそわれ、道後の奥島病院で静養していたが家族の方々の手厚い看護もむなしく医薬の効なく六十一才の生涯を終え七月十三日他界せられたので遺族に対しお慰めようの言葉もありません。心より哀悼の意を表すのみであります。氏を私が知ったのは昭和二年故人が川之江郵便局で通信事務員として電鍵を叩い

ている時代、私は松山担当区より入野局駐在員として派遣せられた直後、川之江局の加入者開通工事に出張を命ぜられたのが始めての土地で地理に不案内で困っている時、氏は親切に公私の別なく世話してくれました。以来工事に出向く度、面倒をみてくれたことは今尚忘れることはできません。昭和七年一月私も川之江局駐在に転勤を命ぜられ部門はことなるが同じ局所で働くようになってから一層お世話になったことはいつまでも覚えております。その時分故人は頑強な体で言語動作も明朗で人情に厚く同僚や部下よりも親しまれ仕事に対しては熱心で責任感も強く町の方々よりは、局の大平さんと信望も厚く昔の三等局では簡易生命保険の募集割当額を定められていたがいつも責任額以上の成績をあげるの故でありましたので川之江局の保険記録にしろされていることでしょう。昭和十二、三年頃より生長の家の地方講師として各所に口演に出向き町の人々よりも慕われておりました。今も目前に浮かんでくることは退庁後に生長の家の口演会のポスターを多数作るのに鮮に筆

を走らせていた姿が臉の裏に残っています。

昭和二十六年川之江電報電話局の誕生と同時に氏は三島報話局の電話係長で配転せられ後、川之江の庶務主任として同じ職場で勤務していたがその後、松山電報局および新居浜報話局を歴任中健康を害し休養中四十年定年退職後は健康も回復して松山で何の憂いも無く趣味の俳句、書道を楽しみ過ぎていて時々墓参等に帰郷の節は必ず立寄り帰松していた去る春も桜の花散る頃突然訪ねて来て、お互に長寿して少しでも長く此世に置いて貰いたいものだなどと冗談を云いつつ愚妻の手料理を皆で食しながら氏の希望により八月盛夏には奥之院へ二、三日泊りの避暑する約束もして別れたが無情の風は時を嫌わずで永眠せられたとは人の人生も全く短く果かないもので残念でなりません。ただ氏のご冥福を祈るのみであります。

編集後記

庭の椿の花が音をたてて落ちました。桃の花びらは馬齢署の葉にとまりました。わけぎを抜いて今晚ぬたにして喰べましょう。暖かくなりました。

春になりました。皆さんお達者でございますか、お伺い申し上げます。お病気で養生なさっております方には、この陽気とともに快方に向われることを念願させていただきます。

新年号に掲載を洩らしました野田さんの故大平福太郎氏の追悼文をおそくなりましたが本号に掲載させていただきます。

二神さんの回想独語なつかしい読みものです。

藤田さんの生活の歌ご夫婦の愛情のこまやかさに打たれます。この次ぎは七月か八月に発行したいと思えます。どうぞ原稿をご惠贈下さいませ。

山崎生

